



今週の注目材料＝米FOMC議事要旨と英CPIに注目

2026年8月17日

世界的にサマーバケーションシーズンであり、取引はやや低調となっています。今週はそれほど目立った米指標の発表予定もなく、市場はウォーシュFRB議長が基調講演を実施する27日から29日のカンザスシティ連銀主催シンポジウム「ジャクソンホール会議」に向かっています。

そうした中、今週ある程度注目を集めているのが、19日(日本時間20日午前3時)発表の米連邦公開市場委員会(FOMC)議事要旨(7月28・29日開催分)です。今年5月22日に就任したウォーシュFRB議長は、就任後初となった6月のFOMCで発表時の声明からフォワードガイダンスを削除。今後もフォワードガイダンスを示さない方針を示し、実際7月のFOMCでの声明もガイダンスを省いた簡素なものとなりました。声明文自体も6月とほぼ同じでした。主な違いは、据え置き決定が6月は全会一致、7月は9対3であったことを示した部分と、潤沢な準備預金を維持するという方針について、6月の「再確認する」から7月の「継続する」への表現変更、そして7月の声明で3名の反対者の氏名と0.25%の利上げ主張であったことを示した部分となっています。前職のパウエル議長時代の声明と比べると分量も3分の1程度となっています。

こうした中、マーケットではFRBの姿勢を知る手段として議事要旨をより重要視しています。

前回6月のFOMC議事要旨では、結果的には全会一致となった同会合において、数人の参加者が金利を引き上げる根拠が既に存在すると主張していたことが判明。また、「参加者は総じて、会合間の期間に受け取った情報が、物価安定に対する上振れリスクが依然として高い一方で、最大雇用の達成に対する下振れリスクが幾分緩和したことを示唆していると判断した」と示しました。これらを受けて市場ではFRB内のタカ派姿勢が印象付けられています。

今回議事要旨が示される7月のFOMCでは、利上げを主張して反対した委員が3名出まし

た。同じ方向(今回はタカ派方向)での反対3名は2016年9月のFOMC以来約10年ぶりとなります。ウォーシュ議長は記者会見での質疑応答で3名の利上げ主張について質問を受け、「利上げを焦るのではなく、収集したデータを見極め、検証するプロセスが必要」と説明しました。また、タカ派的な意見も出た会合での議論について「仲の良い家族喧嘩」と評しています。

今回の議事要旨でタカ派姿勢がより強調されるようだと、ドル高が強まる可能性があります。短期金利市場の動きから算出した次回9月のFOMCでの利上げ期待は、7月28・29日のFOMC前までほぼ100%となっていました。ウォーシュ議長のデータを見極める姿勢を受けて70%台へ低下。さらに7日の米雇用統計で非農業部門雇用者数が予想外の前月比マイナス、平均時給の伸びが予想外に鈍化、労働参加率が2021年2月以来の低水準など、サプライズなほどの弱さを示したことで40%台まで低下し、据え置き見通しが過半数を超えてきています。こうした状況が議事要旨を受けてどこまで変化するかが注目されます。

米国以外の材料としては19日15時の7月の英物価統計があります。中でもインフレターゲットの対象である消費者物価指数(CPI)前年比に注目が集まります。

前回6月の英CPIは前年比+2.6%と5月の+2.8%から鈍化。市場予想の+2.7%も下回りました。ガソリンを含む輸送燃料の前年比が+5.7%と5月の+6.8%から大きく鈍化し、全体を押し下げました。食品・飲料(酒類除く)も+1.7%と5月の+2.2%から大きく鈍化しており、生活必需品を中心とした下げが見られました。ただ、賃金動向など国内要因が主体となることから中銀の注目度が高いサービスインフレは前年比+3.6%と5月の+3.7%から小幅鈍化に留まり、高い水準を維持しています。

13日に発表された英第2四半期GDPは、前期比+0.4%(年率換算+1.7%)と市場予想通りながら第1四半期の+0.6%(年率換算+2.5%)から伸びが鈍化しました。もっとも同時に発表された6月の月次GDPは前月比+0.3%と市場予想の前月比横ばいを上回る成長。四半期ベースでも、G7でトップの伸びとなっており、堅調な成長を見せています。この結果を受けて英中銀金融政策会合の委員でもあるビル英中銀チーフエコノミストは、利上げを後押しするものだとの姿勢をメディアに向けて示しています。

英中銀は7月30日の金融政策会合で5会合連続となる据え置きを決定しました。ただ、投票は6対3と3名が利上げに投票しており、利上げに向けた流れが見られます。市場で

は年内の利上げをほぼ100%織り込んでいますが、次回9月の会合での利上げについては、短期金利市場での織り込みが17%程度と、据え置き見通しが大勢となっています。ただ、今回の英物価統計次第では9月利上げの可能性が高まり、ポンド高につながる可能性があります。

7月のCPIの市場予想は前年比+3.0%と、一気の反発を見せ、中銀のインフレターゲットの許容幅(ターゲットである+2.0%の上下1%、+1.0%から+3.0%)の上限に達する見込みとなっています。市場予想を上回り、許容幅を超える水準まで乗せた場合や、サービスインフレの上昇が見られた場合は、9月の利上げ期待が強まり、ポンド高となる可能性があります。

山岡和雅 | ミンカブ・ジ・インフォノイド 編集長

1992年チェースマンハッタン銀行入行。1994年ロイヤルバンクオブスコットランド銀行（旧ナショナルウェストミンスター銀行）移籍。10年以上インターバンクディーラーとして活躍した後にGCIグループに参画。2016年3月よりみんかぶ（現ミンカブ・ジ・インフォノイド）グループに入り、現在、minkabu PRESS編集部外国為替情報担当編集長。主な著書に「初めての人のFX 基礎知識&儲けのルール」すばる舎、「夜17分で、毎日1万円儲けるFX」明日香出版社など

<免責事項>

本レポートは情報の提供のみを目的としています。投資に関する最終判断はご自身の責任においておこなわれるようお願いいたします。また本レポートに掲載している情報の正確性については万全を期しておりますが、人為的、機械的その他何らかの理由により誤りがある可能性があり、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドは、利用者がこれらの情報を用いて行う判断の一切について責任を負うものではありません。また、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドが提供するすべての情報について、許可なく転用・転載等することを固く禁じます。

<著作権について>

本レポートの著作権は、原則として当社(株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイド)が保有しており、著作権法、その他の法律および条約により保護されています。本レポートご利用のお客様は、私的使用目的の複製、引用等著作権法上認められている範囲を除き、当社およびその他著作権者の許諾なく、これらの著作物を翻案、公衆送信、営利を目的とする使用等いかなる目的、態様においても利用することはできません。